大雨の被害に対する対策（野菜類）

仙北地域振興局農林部農業振興普及課

７月14日から16日にかけての大雨により、多くの水田や畑地で浸水・冠水が発生しており、今後の農作物への影響が懸念されます。
ついては、農作物の被害を最小限にとどめるため、以下を参考に早急に対策を講じてください。

◎ 共通対策

1　ほ場内の停滞水は、根傷みや根腐れ・疫病などの原因となるので速やかに排水する。既設の明渠に崩れや土砂がたまり停滞水が発生していないか、落水口の高低差が確保されているかを確認し、必要に応じて補修を行い、速やかに排水を図る。

2　浸水・冠水により茎葉が汚れた場合は、ほ場の排水に努めるとともに可能な限り速やかに散水などを行い、汚れを落とす。

3　風雨等により損傷した茎葉の整理を行い、病害予防（殺菌剤散布）に努める。

4　パイプハウス内に水が浸入した場合、速やかに排水を行うとともに、換気を十分に行い、土壌の乾燥を図る。施設内では湿度の上昇によって、灰色かび病などの発生が多くなるので、換気扇などを活用し、強制的な換気に努める。

5　根傷みや茎葉汚損により草勢低下が懸念される場合は、曇天時に液肥の葉面散布等を行い生育の回復に努める。併せて、発根効果のある資材（亜リン酸等）を活用して、発根を促す。

6　生育の回復や商品化が困難な場合は、早期に被害株を整理する。生育期間の短い葉菜類等では、まき直しを行う。

7　現在収穫期に入っている品目は、品質の低下が懸念されるため、出荷基準を遵守するとともに検品等を強化する。

病害虫対策のポイント

浸水・冠水により、農作物全般で根傷みや茎葉の損傷が発生するとともに、植物体の草勢・樹勢低下により病害虫への抵抗力が低下しています。
また、梅雨前線の活発な活動により、一部飛来性害虫の発生が多くなる可能性があり、引き続き害虫の発生動向に注意してください。

１）ほ場を丁寧に見回って病害虫の発生をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
２）病害には感染後３～５日程度の短期間で発生するものの他、７～14日後に発生が見えてくるものもあるので、ほ場の見回り・観察は継続して実施する。また、病害の予防として殺菌剤を発生拡大前に速やかに散布する。
３）飛来性害虫（オオタバコガ等）は短期間に急増することがあるため、発生を確認したら直ちに薬剤防除を実施する。
４）殺菌剤・殺虫剤ともに降雨により残効期間が短くなるため、降雨が続く場合には散布間隔を短くしたり、雨間散布に努める。
５）薬剤防除する場合は、散布後の高温により薬害が生じやすいので、朝や夕方の涼しい時間帯に行う。

●えだまめ

土壌の酸素不足により、根の活動の抑制や根腐れ症状の発生が懸念される。併せて、土壌病害の拡大が予想される。

（１）茎疫病
①停滞水又は冠水を受けたほ場では、急性萎凋症状を呈する場合がある。明渠等で排水改善を図り、罹病株は早期に抜き取り処分する。
（２）黒根腐病
①土壌水分が高いと被害が大きくなりやすいため、明渠等で排水改善を図り、罹病株は早期に抜き取り処分する。
（３）べと病
①予防散布に努める。
②中晩生以降の品種で汚損莢の予防として１回散布では開花日から開花３日後にフェスティバルＣ水和剤600倍、ライメイフロアブル2,000倍、ランマンフロアブル1,000倍、レーバスフロアブル2,000倍液を散布する。ただし、発生が多いと予想される場合は追加防除を実施する。
（４）その他（黒く変色した腐敗莢）
①冠水等により根が傷み、養分転流がうまくいかず、莢の表皮の薄くなった部分が雑菌により黒変した腐敗莢が発生することがあるため、出荷基準を遵守する。

●ねぎ

大雨及び今後の高温により、軟腐病と白絹病の多発が予想される。また、土壌の酸素不足等から根の活動が抑制され、葉先枯れ症状が増え、黒斑病・葉枯病の発生が増加すると予想されるので、排水改善を図るとともに、予防剤を中心とした防除対策を実施する。

（１）軟腐病

①発病株は抜き取り、ほ場外で処分する。

②過度な土寄せや高温時の土寄せは行わない。

③収穫前日数に注意し、薬剤による防除を実施する。また、異なる薬剤でローテーション散布を行う。

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	使用回数
オリゼメート粒剤	６kg/10ａ	土寄せ時但し、 収－30日	２回以内
スターナ水和剤 バイオキーパー水和剤 ヨネポン水和剤 Ｚボルドー	2,000倍 1,000～2,000倍 500倍 500倍	収－７日 発病前～発病初期 収－７日 －	３回以内 － ４回以内 －

注意事項

オリゼメート粒剤の砂地での施用は、ねぎに薬害を生じるおそれがあるので、１回の施用量を３kg/10aとする。

（２）白絹病

①発病株は菌核を形成する前に抜き取り、ほ場外で処分する。

②土寄せ時にモンガリット粒剤を６kg/10a株元散布する。アフェットフロアブル2,000倍液を散布する。

（３）黒斑病・葉枯病

①収穫前日数等に注意し、発病初期から薬剤防除を実施する。

農薬名	希釈倍数	使用時期	使用回数
アミスター20フロアブル	2,000倍	収－３日	４回以内
カナメフロアブル	4,000倍	収－前日	４回以内
ダコニール1000	1,000倍	収－14日	３回以内
テーク水和剤	600倍	収－14日	３回以内
パレード20フロアブル	3,000倍	収－前日	３回以内

注意事項

アミスター20フロアブルは、近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔は２週間以上確保する

●アスパラガス

大雨による土壌の跳ね上がりから茎枯病の発生が増加すると予想される。また、ほ場が過湿になりやすく、斑点性病害（斑点病、褐斑病）の発生が増加すると予想される。また、高温多湿より軟腐病の発生が増加すると予想される。

（１）茎枯病、斑点病、褐斑病

①茎葉の蒸れを防ぐため適正な立茎数を保つとともに、下枝や２次側枝の除去

による管理を行って通風を図る。
②浸水・冠水した萌芽は速やかに除去し、無駄な養分消耗を防ぐとともに、病害発生を防ぐ
③薬剤による防除を実施する。

農薬名	茎枯病	斑点病	褐斑病	希釈倍数	使用時期	使用回数
アフェットフロアブル	○	○	○	2,000倍	収－前日	４回以内
アミスター20フロアブル	○			2,000倍	収－前日	４回以内
コサイド3000	○	○	○	2,000倍	－	－
スコア顆粒水和		○		2,000倍	収－前日	２回以内
ダコニール1000	○	○	○	1,000倍	収－前日	４回以内
ラリー水和	○	○	○	4,000倍	収－前日	２回以内
ロブラール水和	○	○	○	2,000倍	収－前日	５回以内

注意事項
アミスター20フロアブルには展着剤を加用しない。また、高温多湿条件下で使用すると萌芽部の曲がりを生じるおそれがある。

（２）軟腐病
①発病茎は、ほ場外で処分する
②出荷基準を遵守するとともに、出荷前の予冷を十分に行う。

●きゅうり

大雨等により茎葉が傷み、浸水・冠水等で草勢が弱っているため、各種病害の発生が増加すると予想される。傷んだ茎葉を整理・除去し、病害の発生状況を確認しながら防除対策を行う。また、土壌病害の発生が懸念されるため、草勢の維持管理を適切に行うとともに発病が確認された場合は次年度の対策を検討する。

（１）べと病、炭そ病、褐斑病
①損傷した茎葉の整理・除去を行う。
②発病前にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等の予防剤を散布する。
③べと病を確認した場合は、リドミルゴールドＭＺ、ゾーベックエニベル顆粒水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、アミスター20フロアブル、ホライズンドライフロアブル等で防除する。
④炭そ病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤等の治療効果がある薬剤を散布する。また、薬害防止のためアミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない、かつ、高温時の使用を避ける。
⑤褐斑病は、発生後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラーノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000等の予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤

等の治療効果がある薬剤を散布する。

（２）斑点細菌病

①損傷した茎葉の整理・除去を行い、銅剤又はその混合剤を散布する。

（３）疫病

①損傷した茎葉の整理・除去を行い、発病前にジマンダイセン水和剤を散布する。

（４）つる枯病

①損傷した茎葉の整理・除去を行い、発病前にジマンダイセン水和剤、トップジンM水和剤等を散布する。

●トマト

ハウスへの浸水が有った場合は根痛みを起こし萎れ等の症状が出ると予想される。またそれに伴い花芽分化中の花芽の質が悪化したり、落花や着果不良を起こしたりすることが考えられる。また、土壌病害の発生が懸念されるため、草勢の維持管理を適切に行うとともに発病が確認された場合は次年度の対策を検討する。

（１）灰色かび病、葉かび病、すすかび病

①萎れ等で枯れた茎葉を整理･除去を行い、発病前にペンコゼブフロアブル、ダコニール1000等の予防剤を散布する。

②発生が見られたら、直ちに治療剤の散布を行う。アフェットフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、シグナムWDG等

（２）青枯れ病

①抵抗性台木を使っていても浸水による根傷み等で青枯れ病の発生が懸念される。発病した場合は、株元から切除して圃場外へ廃棄する。根ごと抜こうとすると、近接する株と根が絡まっており、近接株の根まで傷つけ手しまうため栽培終了後、確実に羅病株を抜き取り圃場に残渣は残さない。

●すいか

大雨等により茎葉が傷み、浸水・冠水等で草勢が弱っているため、疫病、炭そ病等の発生が増加すると予想される。傷んだ茎葉を整理・除去し、病害の発生状況を確認しながら防除対策を行う。また、草勢の維持管理を適切に行う。

（１）疫病、炭そ病

①発病前にジマンダイセン水和剤等の予防剤を散布する。

②炭そ病を確認した場合は、アミスター20フロアブル等の治療効果がある薬剤を散布する。また、薬害防止のためアミスター20フロアブルは浸透性を高める展着剤を加用しない、かつ、高温時の使用を避ける。

（２）その他（果実腐敗症）

①収穫及び出荷作業時の選別を徹底する。出荷基準を遵守する。